

ツンデレクールなメイドさんに、土下座でスケベなことをお願いしてみた

2021 ごまらららハート

//トラック1

「.....ご主人様、寢室の掃除が終わりました」

「あいも変わらず、私がいなければ
掃除ひとつまともに出来ない愚鈍なお方.....」

「まあ.....これも仕事ですから。仕方ありませんね」

「では、私はこれで.....」

「.....なんですか？
いきなり腕をつかんだりして」

(主=あるじ)
「いくら主とはいえ、許可なく異性に
触れるのはありえません、通報されたいのですか？」

「は.....？
いやらしいことがしたい.....？」

「やれやれ、私のご主人様は人間ではなく、
女なら誰彼構わず襲うケダモノだったんですね」

「続きはどうぞ、ブタ箱でお仲間と和気藹々してください」

「.....冗談ですよ。あなたにはせいぜい、
私のお給金分働いて頂かないと」

「発情期なら、いつもみたいに
ご自分でなさったらどうですか？」

「ふ.....私が気づいてないとも思いましたか」

「イカ臭くなった汚らしい部屋を
誰が掃除していると？ まったく、これだから.....」

「……そんな真剣に見つめられても、どうにもなりません。
なぜその情熱を、他のことに向けられないのですか」

「はあ……。
どうしても言うなら、そうですね」

「土下座でもしてみてください。
無様に、地面に這いつくばって。みっともたらしくおねだりすることです」

「……は？
あなたにはプライドとかないんですか？」

「……そんなに、したいのですか？」

「なら、他の人に頼めばいいじゃないですか」

「私じゃないと、嫌……ですか……」

「……っ。(言い淀む感じ)
……愚かな主を持つと、苦勞が絶えません」

「いっぺん死んでください。今すぐに」

「……と、言いたいところですが。
……はあ～……(照れ混じりのため息)」

「……今回1度きりです」

(違え＝たがえ)
「もし約束を違えれば、
ご主人様の新居は檻の中ですから。いいですね」

「では、さっさと済ませてしましましょう。
この上なく無駄な時間なので」

「……はあ。抱きしめられた状態で、
男性器を触られたい、と……」

「しかも、耳元で囁け……？」

「いきなり注文が多いですね。
あまり調子に乗らないでください」

(一日の長＝いちじつのちょう)
「まあ……下品な知識においてのみ、
貴方に一日の長があることは認めましょう」

「……っ。経験がないので、従うと言ってるのです。
早く座ってください。のろまなご主人様」

「まったく……」

(リアも隣に座る演出)

「鼻の下なんか伸ばして……
今までよく捕まらずに済みましたね」

「今のご自分を、鏡でご覧になった方がいいですよ。
いかにも性犯罪に手を染めていそうな、醜悪な顔をなさっているの」

(最初、息を整えるイメージで)
「……ふう……それでは、失礼いたします」

(ユーザーを抱きしめる)

「んっ……う……暑苦しくて……雄臭い……
最低な……抱き心地、です……」

「……それに、胸がつぶれて……んっ……苦しい、ですね……」

「……ご主人様、視線が気持ち悪いです。
もしまたこちらを見たら、社会的に抹殺します」

「目を瞑って……そう、大人しく、その空っぽの脳みそで
卑猥な妄想でもしておいてください」

「はあ……まさか、初めて抱きしめる男性が
ご主人様だなんて……今日は厄日ですね」

(1行目少しだけ照れ混じり)
「……嬉しいなんて、思うわけがないでしょう？
都合よく解釈なさらないでください」

「やれやれ、妄想と現実の区別もついていない危険人物だったとは……
就職先を完全に間違えましたね……」

「まあ……今さら、四の五の言っても仕方ありませんね。
お望み通り……触ってさしあげますよ……」

「こう、ですか……？ んっ……う……」

「ふふ……
耳まで真っ赤にして、みっともない……」

「んんっ……どンドン、膨らんで……
不愉快な感触ですね……んっ……」

「普段何食わぬ顔で、こんな卑猥なモノを
ズボンの中に収めていたとは……」

「これからは、ご主人様を見る目が変わりそうです。
……もちろん、さげすんだ目ですよ？」

「メイドに無理やり性的奉仕をさせて、まんまと
男性器を大きくする変態ご主人様なのだと、心底軽蔑してますから」

「.....また大きくなりました。
まさか、罵られて興奮を？」

「変態な上にドMとは。
生きてて恥ずかしいんですか？」

「変態.....恥知らず.....ケダモノ.....」

「ん.....パンパンに張って、
突き破りそうな勢いですね.....あ.....っ」

「う、あ.....先端が、湿ってきました.....
なんですかこれは.....がまん、汁？」

「ああ.....どんどん染みが広がって.....
いい年してお漏らしですか、情けない.....」

「.....洗濯するのは、私なんですよ.....？
こんな汚い汁を出して、これ以上、洗い物を増やさないでください」

「.....どうせ、すでにおかしなことになっているんです。
生で男性器を見るくらい、問題ありません.....」

「ご主人様こそ.....今さら、怖気付かないでくださいよ.....
ほら.....脱がし、ますから.....」

「っ.....！ う.....あ.....
これが.....本物の.....」

「おおき——、グ、グロテスク.....
ご主人様にお似合いの.....実に、粗末で汚らしい男性器、です.....」

「すんすん.....これが、イカ臭い匂いの元.....
すんすん.....はあ.....あ.....ん.....」

「.....こ、興奮なんてしていません。
初めて見たら、驚くのは当然です」

「というかこれ.....触って大丈夫ですか？
病気になったりしませんか？」

「っ.....。安全なことくらい分かってます。
聞いてみただけです」

「ほら、さっさと.....命令したらどうですか」

「.....なるほど、
掌で、竿を.....握って.....」

「あ……熱……
ぶにぶにして、気持ち、悪いですね……」

「それで、このまま……上下に……しこ、しこ……などと……
不愉快な擬音を折り混ぜながら……擦すればいいのですね……」

「まったく……これしきのこと、
なぜ、ご自分で出来ないのでしょうか……」

「……んっ……
しこ、しこ……しこ、しこ……」

「ん……っ、ふっ……無暗やたらに、
ヒクつかせないでください……集中、できません……」

「しこ……しこ……ん……あ……しこ、しこ……」

「んっ……ガマン汁が……手に……
ぬちゅぬちゅと……不快な音です……」

「ですが、ご主人様はお好きなようですね……
小鹿のように、腰が震えてますよ……」

「ぬちゅ……ぬちゅ……
しこ……しこ……しこ……」

(二行目、少し面白くなってきた感じで)
「……気づいてないようですが、
……息も荒くなっています。ふふ、本当に、無様な顔……」

「もっと強く握ってほしいのですが……
堪え性の無いご主人様には、我慢を覚えていただきます……」

「強く握るって擦ると……あっというまに
射精、というものをしてしまうでしょう？」

「何から何まで……
思い通りになると思ったら、大間違いですから……」

「しこ……しこ……ぬちゅ……しこ……」

「んあ……まったく……勝手に腰を動かして、
気持ちよくなろうなんて、浅ましいにもほどがあります……」

「……ご自分でなさる時も、そうやって、
節操なく擦ってあっという間に果てているのでしょうか？」

「猿のように、息を荒げながら無我夢中で
性器をいじり続けている姿……容易に想像が出来ます……」

「しこ……しこ、しこ、しこ……
んんっ……う、あ……何ですか、これは……」

「匂いが一段と、キツく……うっ……ふ……
んっ……下品すぎて、これ以上嗅いでられません……」

「仕方、ありませんね……
お望み通り、強く握ってさしあげます……」

「ぎゅう……ぎゅう……
しこ……しこっ……んっ……うあ……」

「無理やりメイドに扱かせておきながら……自分は
気持ち良くなることだけで頭がいっぱい……」

「大層なご身分ですね……恥を知ってください……
射精するしか脳のない、猿以下のケダモノ……」

「んっ……手の中でっ……また大きくっ……
んんっ……生き物みたいで、気持ち悪い……」

「いいですか……ご主人様が……
味をしめないように……今一度、言っておきます……」

「こんなことをするのは、今回だけ……
あくまで、我々は雇用者と被雇用者……ビジネスな関係……いいですね……？」

「分かりましたかっ……？
分かったなら、早く射精してくださいっ……」

「このいやらしい男性器から、溜め込んだ劣情を……
恥ずかしげもなく、まき散らしてください……！」

「にぎ……にぎ、にぎ、ぎゅう……！」

「しこ、しこ、しこ……しこ……しこ……！」

「出していいと、言ってるんです……！
誰に遠慮しているんですか……出して、出してください……！！」

「んんんっ……くっ……ふ、あああっ……！？
熱っ……すごい勢いでっ……あああっ……！」

「う……あ……服にまで……
どれだけ、溜め込んでいたんですか……」

「はあ……はあ……こ、これが……
男性の……ご主人様の……せい、えき……」

「ん……く、最悪です……
匂いが……鼻に、こびりついて……んう……あ……」

(匂いでムラムラしかけてる)
「……っ。ん……はあ……はあ……」

「……随分と、粗末なサイズになったようなので……
これで……失礼します……」

「飛び散った体液その他諸々は、
どうか、ご自分で片付けてください……」

(2行目は少しだけ照れ混じり。ムラムラしそうなのを隠してる)
「私はこれ以上、ここにいと
……とても、不快な気分になりそうなので」

「今日のことは……お互い、忘れましょう」

「では……私はこれで」

//トラック2

「ご主人様、寢室の掃除が終わりました。
それでは私はこれで……」

「……なんですか、その土下座。
そして媚びるような上目遣い……」

「……まさか、またいやらしいことをしてほしいと……？
味を占めてしまった、というわけですか。はあ……」

「……あれだけ1度きりだと言ったのに。
お持ちの脳みそは、どうやら鶏並みだったようですね」

「ご主人様に刑務所は勿体ありません。
養鶏場に出荷しましょう。繁殖用の精子サーバーとして大活躍出来ますよ」

「……まあ、行く先々で性犯罪を犯されるよりはマシです。
私の生活にも関わりますので」

(本当は欲情してもらえて嬉しいので、二行目の『業務～』は言い訳っぽい感じ)
「ですが勘違いしないように。これはあくまで脳みそが性欲で爛れきった
ご主人様の、欲望を処理する……業務。そう、業務ですから」

「……それで。メイドを私物のように扱う度し難い変態ご主人様。
今日はどのようにすれば？」

「……前と同じように、抱きしめればいいんですね。
まったく、飽きもせず……どうぞ。こちらへ」

(抱きしめる)

「んっ……う……あの、すでに
ズボンがパンパンに膨れ上がっているようですが」

「まあ、その方が色々と早くて助かります。では……」

「……心配いりません。
ご主人様のこじれた性癖は、既に把握済みですから」

「メイドに、大事な場所を撫でられて勃起し……
はぁはぁと情けなく息を上げる……」

「なんてだらしないご主人様なのでしょうか。
これが終わったら、次回の契約を見直しますからね」

「私がいなくなるのが嫌なら、こんな淫らな要望は、
絶対に……最後にしてください」

「んんっ……どんどん大きくなっていきますね……」

「毒舌を浴びせられながらも、男性器を屹立させるなんて……
本当、理解に苦しみます」

「どうせ下着の中も、汚い汁まみれになっているのでしょうか？
早く脱いでください。汚れると面倒ですから……」

「んんっ……何度見ても……男性器というのは……
おおき——、グロテスクですね……」

「……うっとりしているのではありません。
なぜそのような発想になるのですか」

「ただ驚いているだけ……
淡い期待はしないことです……」

「では……また握ってしごけばいいのですね？」

「まったく知識がないのも良くないと思ったので
多少調べてきました。ですので、前回よりもスムーズに致します」

「ご主人様を喜ばせるためではありません。
年頃の女として、最低限知っておくべきだと思ったまで」

「さあ、早く終わらせますよ……え？
今回は、手じゃなく……口で、ですか？」

「ご主人様……正気ですか。
キスもしたことのないメイドに、フェラチオをしろと？」

「かける言葉が見つかりませんね……
強いていうなら、憐れみ、でしょうか」

「……はぁ。どうせしないと……
また子供みたいに、駄々をこねるのでしょうか？」

「仕方がないですね。
大人しくそこで座っていてください」

「っ……目の前にあると、迫力が……
……いえ、忘れてください」

「それで、どうするのですか」

「手コキについては学んだつもりですが……
フェラチオはまだ知識不足……」

「ですので……いささか不服ですが、
指示の方を……お願いします」

「舌先で、棒をなぞるように、舐める？」

「はあ、このように、ですか……………
ん、れろ……れろ……ん……苦……」

「ジロジロ……見ないでください……
視線が……不快です……」

「私をこんなことで……手玉に取っただなどと
思わない、ことです……」

「れるっ……ぺろっ……れろろっ……んっ……れるうっ……」

「んっ……我慢汁が……先の方から溢れてきましたよ……
もう……気持ちよくなっているのですね」

「メイドに男性器を舐められて、んちゅっ、性的興奮する主が……れろっ……
この世の中に存在するなんて……」

「ん……男性器ではなく、おちんちん……？」

「男性器、で十分伝わるではないですか。
どうしてそんな単語で言う必要があるのです？」

「……ああ、なるほど。男性は、女性にいやらしい言葉を言わせたいと、
調べた本に書いてありました」

「まあ……それで昂ってさっさと射精してくださるならかまわないですよ」

「れるっ……んっ……ぴちゃっ……
おちんちん……ぴくぴくしてます……」

「んっ……ぴちゃっ……私が、おちんちんと口にしたら、れろっ、
嬉しそうな顔をして……単細胞にもほどがありますね……」

「はあ……ん、ちゅうっ……
私は、とんでもない主に仕えてしまいました……れろおっ……」

「ん……棒の部分だけではなく……先っぽも……？
んちゅっ……んっ……れろっ……んっ……こうですか……？」

「れろっ……啜えたら、もっと気持ちいい……？
まったく……性懲りもなく注文ばかり……」

「んっ……じゅぶっ……んむあはあっ……
ご主人様のおちんちん……無駄に太くて……啜えるのも、一苦勞です……」

「しかし……望むとおりにすれば、奉仕時間も削減できますから…
んあむっ……じゅっ……じゅぼっ……んんむっ……じゅばあっ……」

「んぶっ……ちゅう、んじゅ……腰が……
引けてますよ……情けない……ふふっ……」

「んじゅっ……じゅっ……じゅぼっ……んっ、んんっ……
れろおっ……じゅれろっ……んれろおっ……」

「んぶあっ……ふうっ……ふうっ……うまくなってきたなんて……
そんなこと言われても、んれろっ、まったく、嬉しくないですっ……」

「では……そろそろ射精なさりますか？ ちゅぱっ……
しかし、このままでは私の口の中に出してしまうことになります」

「ん、れるっ……出された精液は一体どうしたらいいのでしょうか……」

「んじゅっ……んっ……飲み干せと……？ んんっ……
どこまでも、んれろっ……下衆な発想、れふね……んじゅっ、じゅぼっ」

「んっ……ですが、床にまき散らされても、面倒れふ……んんっ……
気は進みませんが……今回だけれふから……んちゅ……ちゅるっ……」

「んっ、んっ……じゅぼっ……じゅるるっ……
んんむっ……さあっ……はやふっ……らひてくらはいつ……！」

「じゅっ、じゅっ、じゅぼっ、じゅるっ、じゅぶっ、じゅっ、じゅっ！」

「んっ、んっ、んんんんんっ～～～っ！」

(精子を飲んでいます)
「んくっ……んっ……んくっ……んんっ……んぶあっ……
けほっ……けほっ……んんっ……」

「はあっ……はあ……だ、出しすぎです……っつ
こんなに、たくさん……けほっ……」

「はあ……あ……んっ……
喉に……絡んで……口の中、むせ返りそうなほど、匂いが……」

「味なんて、わかるわけ……ないでしょう……
飲み込むので精一杯だったので……出し過ぎ、です……」

「はあ……はあ……っ」

「.....まだ、し足りないのでしょうか？
おちんちんを見れば、分かります.....」

(本当は自分もしたいのに、素直になれないので遠回しに言っている感じ)
「.....まったく。1回したなら、
2回も3回も変わりません。ですから.....」

(本当は行為をしたいのに、素直になれないので遠回しに言っている感じ)
「早いところ、溜まりに溜まった精子を無駄撃ちして、
大人しくなってください.....他の業務に、支障が出ますから.....」

「.....は？ 今度は足、こき.....？」

「.....聞いた事ありませんが、予想は付きます。
要するに足を使って、おちんちんへ快感を与えるのですね？」

「.....もう、どうにでもなれ、です.....」

「どうせ拒否しても引き下がらないでしょうし.....
さあ、どのように行えばいいのですか？」

「っ、意気揚々と仰向けになりましたね.....
この情けなく勃起したおちんちんを、足でしごけばいいんですね.....？」

「しかしこのままでは、ガーターストッキングが汚れてしまいます。
脱ぐのでお待ちください.....え？」

「脱ぐのは、片方だけ.....？
はあ.....また新たに、知りたくもない性癖を知ってしまいました」

「んっ.....お望みどおり、片足だけ脱ぎましたよ.....
.....気持ちの悪い笑みを浮かべないでください。吐き気がしてきますから」

「さっさと終わらせますよ.....この両足で.....
堪え性のないご主人様の豚ちんちんを.....しごいて差し上げます.....」

(以下、射精までは少し興奮ながら吐息多めをお願いします)

「んっ.....くっ.....ご主人様の体液がっ.....」
ベタベタとまとわりついて.....とても不快です.....っ.....ふう.....」

「また、豚みたいに、鼻息が荒くなってますよ.....んっ.....
足コキされて.....そんなに嬉しいのですか.....っ」

「んっ.....さらに、硬くなってっ.....はあっ.....んっ.....」

「はあ.....んっ、
私まで.....う.....何でも、ありません.....」

「別に.....興奮してるわけでは.....
さきほどのフェラチオで.....酸欠気味なだけ.....んっ」

「はあっ……んっ……顔が赤いのもっ……気のせいですっ……
私がこんな……ふしだらな行為に、欲情するなどと……」

「色欲で人格がイカれてしまった、憐れな
ご主人様とはっ、違いますから……」

「まったく……こんなにいきり立たせてっ……
はあっ……情けない声を上げながら、よがりまくって……」

「はあっ……はあっ……我慢汁がっ……
どんどん溢れているじゃないですかっ……汚らしい……」

「汚すことしか能のない、駄目ちんちん……
どれだけ、私の仕事を増やせば……んっ、う……」

「ゴミクズ以下の……度し難い……性癖です……っ
お望み通り、虫けらだと思って、踏みつけて、さしあげます……」

「んっ……はあっ……どうせこんな風に、
ぐり、ぐりと……踏みつけられるのが、お好みでしょう……？」

「ぐり……ぐり……あ、ビクビクさせるの、やめてください……
足の裏で……んう……変な感じ——、んっ、気持ち悪い、です……」

「ぐり、ぐり……ぐり……
ぎゅう……ぐり、ぐり……」

「んっ、ふっ……メイドの前で、恥ずかし気もなく
感じまくっている姿を晒す、なんて……」

「はあっ……はあっ……これ以上……
不様な姿を見せないでください……」

「はやくっ……射精してくださいっ……
もっと、ぐりぐり、してあげますからっ……んっ、んっ……」

「ぐり……ぐり、ぐり……ぐりっ……！」

「それとも、不感症……ですかっ……
精子を無駄撃ちするしか使い道のない、おちんちんなのに……」

「ぐり……ぐり、ぐり、ぐり……
んっ……仕方、ありません……」

「はあ……んっ、分からずやのご主人様には、
もう少し強く、言ってあげた方が、よさそうですね……っ！」

「イって……イけ……イけ……！
メイドにおちんちんを踏みつけられながら、情けなくイけ……！」

「ぐり、ぐり……ぐり……ぎゅう、ぎゅう……ぎゅう……」

「ほら……イケ、イケ……イケ……！
びゅう……びゅう……びゅううう……びゅううう……！！」

「んんっ……あ、う……あ……！？」

「あっ……ああっ……2回目、なのに……
まだ、こんなに……んっ……ううっ……！」

「はあっ……はあっ……
本当に、最後まで、出し切りましたか……？」

「無駄に、精子だけは有り余っていますからね……
二度と無駄な時間を過ごさなくても良いように、搾り出さないと……」

「ぐり……ぐり……んあ……
どろりと、溢れて……まだ尿道に、残っていましたか……」

「はあ……はあ……
……先ほどは、失礼いたしました」

「仮にも主に対して、
『イケ』などと、不躰な命令を……」

「……少々、興が乗ってしまいました」

「ひとまず……シャワーでも浴びてきます」

「貴方の体液で、スカートも、ストッキングも……
ドロドロに汚されてしまいましたので」

「……別に、気にしないでください。
これくらい、もう慣れましたから」

「では……また」

(ドア越しで小声の想定です)

「……はあ。
私も、面倒な女ですね……」

//トラック3

「……ご主人様、掃除を終えました」

「今日は、特別なアロマを焚いて差し上げます。
華やかで甘い香りが特徴のイランイランです」

「アロマを焚くのが、そんなに珍しいですか？
たまにはこういったサービスもよろしいかと思っただけなのですが」

「それから、特別にブレンドしたハーブティーもお入れしました。
どうぞ、お飲みください。お茶請けにおかきも用意しています」
「……なんでしょう？ そんなに不思議そうに見つめて」

「ああ、確かにいつもは掃除が終わったらすぐに
出て行こうとしますね……」

（何か言いにくそうに吐息を漏らす）
「……………」

「あの……今日は、いやらしいことをお願いしないのですか？」

「いえ別に……日に日にご主人様の変態度が増して、
要求することがどんどんエスカレートしていますので」

「先んじてこちらから処理をしておいた方が安全……そう判断したまでですが？」

「性獣になったご主人様が、他のご婦人を襲ってしまう可能性は極めて高いですから」

「そんな悲惨な未来を避けるための、合理的な手段です。勘違いしないでください」

「そのアロマもハーブティーも、すべて、性的欲求を刺激し、処理しやすくするためのもの……」

「決して……ご主人様といやらしいことをしたいわけではありませんので」

「さあ、どうしますか？
そのような気分ではないとおっしゃるなら、構わないですが」

「……セックスが、したい？……」

「それは、その……つまり……
男女が交わる、アレ……ということですか？」

「とうとうそんなことをお求めに……
ああ、なんということでしょうか……」

(二行目は照れ隠しのイメージ)
「……嬉しいわけがありません。
そんなお願いをされるなんて、むしろ……最悪の気分です……」

「しかし……断るわけにはいきませんね。
行きずりの女性をレイプされても困りますから」

「そのようなことは……あってはなりません。
なので……セ、セックス……いたします、いいでしょう」

(恥ずかしさをごまかすように)
「さあ、早く始めましょう……
まずはいつも通りでいいですよ……？」

(正面から抱きしめる)

「ん……もう、ズボンに染みが出来ていますよ……
私とまぐわうと考えただけで、そうなったのですか……」

「まったく……どうせ他に使うアテもないんですから、
いっそのケダモノおちんちん、去勢すればいいのに……」

「精力ばかり無駄に有り余って……他に才能ないんですか？
精子の無駄打ちは楽しいですか？」

「誰も相手をしてくれないから、今日もこれから
メイドごときに劣情をぶつけて発散するしかない、情けないご主人様……」

「またそうやって、ビクビクと大きくして……
プライドの欠片もない……犬ですね。貴方は駄犬です……」

「犬なら自分で何一つ出来ないのも納得です。
仕方ないので、私がズボンを脱がしてあげましょう」

「っ……！ いつもより、大きいですね……
みっともないほど、膨らませて……そんなに期待してるんですか？」

「あっ……んっ、や……いきなり私の……下着、触るなんて……
ご主人様は、大人しく、していただきっ……」

「ああっ……あ、あっ……
くっ……や、やめてと言っているでしょうっ……ああっ……」

「はあ……あ、んくっ……
どこで……そんな触り方を……変態……へん、たい……んあっ」

「はあっ……濡れて……なんかないですっ……
そ、それは、ただの生理現象ですから……んあっ……」

「んっ……下着、脱がさないで……っ！
本当に、盛りのついた犬だったんですね、貴方は……んんっ……あっ！？」

「ゆ、指……入ってっ……あ、あ、ああっ……
くっ、ううんっ……」

「気持ちよくなんて……は、うっ……ありませんっ……
あんっ、ああっ……自分でした方が——……う、わ、忘れてくださ……んんっ！」

「ご……ご主人様の性欲処理のために……
色々と、覚えておこうと思っただけ……業務の、一環ですから……！」

「だからニヤニヤと、下品な笑みを浮かべないでくださいっ……
見るに、耐えません……吐き気が——、んんっ！……あうっ……」

「はあんっ……んっ……声が漏れているのはっ……
ただの、反射っ……私の意志とは関係なく、勝手にっ……んんっ」

「気持ちよさそうな、顔をしている……？
んっ……そんな、きのせい……！」

「ご主人様が……いつもの気持ち悪い妄想癖で、都合のいいように
解釈しているだけっ……あっ……んっ……んっ……」

「くっ……ううっ……！ ああっ……！
ご主人様、一度止めてくださいっ……あんっ、お願いですっ……！」

「り、理由は、特にありませんがっ……あ、あっ……」

どうしても、ですっ、んっ、んっ」

「つつふ、あつ……
だから、やめてと……んああッ、激しくしないでっ……」

「はあ……あつ、う……そんな……、雑なだけで……
テクニックの欠片もない、愛撫……気持ちよく、なんか……」

「くっ……い、いやですっ……やめっ……んっ、ふ、うっ……！」

(声を押し殺して絶頂してるイメージ)
「んっ、はあ……あう……！ ～～～～っ……！」

「んうっ……んくっ……はあ……はあ……」

「イ……イクわけじゃないですか……
あまりに退屈で……欠伸をしてしまった、だけです……」

「はあ……はあ……も、もう、入れたい……？
……堪え性がないにも……ほどがありますね……」

「立場の弱いメイドを、性処理の道具として散々使い倒した挙句……
あまつさえレイプするかのように、貞操を奪うなんて……」

「あえて言わせていただくと、最低のクズですね……
気の利いた言葉の一つでも——」

「——は？
私が好き、ですか？」

「だから……したいと、そう言いたいのですか？」

「……………はあ。そう、ですか……」

(1行目は言い淀む感じ。2行目は照れ隠しです)
「……………っ。
言うに事欠いて……それですか……本当に最低ですね……」

(究極の照れ隠しです)
「……残念ながら、
私は、貴方の事が全く好みではありませんが」

「……元々、そういう約束でしたし。
乗りかかった船ですから」

「……早漏なおちんちんが、
すぐ果ててしまわないよう、せいぜい頑張る事です」

(抱きしめあう)

「……あの、どうしても、
抱き合ったままでないと駄目でしょうか」

「いえ……顔を見ながらというのが……その……
何でもありません」

「んっ！？ 急に、入れようとするなんて……ふ……ん……んあ……
落ち着いて、ください……これだから、童貞は……」

「んっ……んんっ……あああっ……！
入口が……広がってっ……くっ、うんっ……」

「もう少し……ゆっくり、できないのですか……ふ、あ、あああっ……
まったく、貴方という人は……仕方、ありませんね……はあっ……」

「こんなっ……凶器じみた、豚ちんちんをつ……
他の女性に挿入させるのは、女性があまりに気の毒、です……はああ……」

「私が、甘んじて、受け入れるしか……は、うっ……うんっ……！
う……ああ……奥まで、来てる……んっ……はあ……あ……」

「お腹……苦し……ん……はあ……んんっ……
これで……全部、ですか……う……くっ……」

「はあ……はあ……初めてが、よりにもよってご主人様とは……
思いもしませんでした……んっ……」

「……痛くはないかなどと、
今さら……紳士ぶらないでください……」

「私の知っているご主人様は……変態で……ドMで……
すぐ私に発情してしまう……どうしようもない、男です……」

「今だって……私の女性器に……
侵入出来た喜びで、胸いっぱいなのでしょう……？」

「なら、欲望の赴くまま、好きにすればいいじゃないですか……
私はどうせ……主の為す事を、受け入れるしか、ありませんから……」

「あっ……んっ……んっ、うううっ……！
いきなり……深い……あ……ん、ああっ！」

「く、あっ……はああっ……
出たり、入ったり……何ですか、この、感覚……はああっ！」

「はっ……ううっ……
今、どこに何が入っているか……卑猥な言葉で、言えとっ……？」

「い、言いません……絶対につ……
ご主人様が、調子に乗るだけですからっ……はああ……あっ……」

「んっ……言わないと、抜くなんてっ……
はううっ……んっ、んんっ……」

「そっ……そんな脅し文句、通用しませんよっ……？
ご主人様らしい、浅はかな思考ですっ……」

「女性が……男性を求めて乱れるなんて……
ただの幻想、ですからっ……んっ……」

「事実、気持ちよくなんてありませんしっ……はあっ……あんっ……
別に私は、中断しても構いませんっ……んっ、んっ、ああっ！？」

「くっ……ああっ……はんっ！
あんっ……やっ……激しいっ……！ んっ、ううっ、ああっ！」

「あんっ……やっ……声、勝手に、大きくっ……！
ひんっ、うっ、あっ、あ、あああっ……！」

「いっ……んっ……ああっ、あ、あ、あっ……！
ご主人様っ、だめですっ……ゆっくり、動いてくださいっ！」

「んあ、あああっ……！
言うことを聞かないお仕置きだなんてっ……やっ、あ、やああっ！」

「あんっ……あ、ああっ……あんっ……やっ……
やめっ……あんっ！」

「やっ……やめてくださいっ、ひっ、ううっ……！
こんなことしてっ……いくらご主人様でも許しませんよっ……！」

「あ、あ、ああっ！
きっ、気持ち良くなんか、ありませんからあっ……！」

「ひっ、いいうっ……！
あんっ、ご主人様っ……お願いですっ……とめ、とめて……っ！ ああっ！」

「……えっ……あ……んんっ、
本当に、止めてしまう、なんて……」

「……っ！ そうですね……
中断しても……構わないと言ったのは、事実、ですが……」

「……ご主人様ごときに、調子を狂わされるなんて……
私としたことが……」

「……はあ。わかり、ました……」

「言えば、いいんでしょう……
低能なご主人様が喜ぶような、卑猥な言葉を」

「ええ、大変屈辱ですが……それで、満足するなら……」

「……あ、あの……」

「先ほどみたいに……わ、私のおまんこへ……」

ご主人様の、たくましいおちんちん……」

「早く……入れて、ください……
淫語でもなんでも、言います、から……お願いします……」

「んっ……んうう、んあぁっ……き、来たっ……
んんっ……くっ、おちんちん、入ってるっ……はぁぁっ……」

「あぁっ……はんっ……んんっ……
勝手に……きゅうきゅうっ……しめつけてしまいますっ……」

「トトロ口になった、メイドおまんこがっ……
ご主人様のどスケべおちんちんを……あぁんっ……」

「はぁんっ……こんな、こんな下品な女に……
なってしまうなんてっ……ぁんっ……あ、はぁぁ……っ！」

「全部、ご主人様のせいですよっ……んっ……
一生恨みますからぁっ……んっ、ふっ……」

「……あ、待って、くださいっ……
そんなに顔、近づけないで……まさか、キスを……んううっ！？」

「んちゅっ……んっ、ちゅっ、ちゅびっ……ちゅばっ……ちゅ、ちゅっ……」

「ちゅぶ……れりゅっ……んんっ、れろろっ……れるっ、ちゅばぁっ」

「はぁっ……はぁ……はふっ……
私の、初めて……全部……ご主人様が……はぁぁっ……」

「はんっ……ぁんっ……んんっ……
嘘、また大きっ……中、広がっちゃう……んあッ、あ、はぁぁっ！」

「ひっ、ううっ……やぁっ……
ぁっ……そこっ……だめですっ……あぁぁっ」

「そこ刺激されるとっ……
あ、ふぁぁっ……変に、なるんですうっ……んんんっ」

「はぁっ、ぁんっ、んっ、くっ、ふっ……
や、やぁっ……あぁぁっ、ぁんっ、ぁんっ……！」

「あぁぁぁっ……私っ……すごいやらしい声っ……
出してしまっていますうっ……んっ、うっ……あぁぁっ……！」

「あ、あううっ……こんなの、我慢できない……っ！
ぁんっ……きもち、いいっ……きもちいいっ……！」

「ご主人様の太くて、大きな、逞しいおちんちんでっ……
おまんこがっ、喜んでるんですうっ……！」

「ぁんっ、あぁぁっ……おまんこの奥、コツコツされるたび……

ひ、あああつ……おかしくなりそうでっ……あ、あああつ」

「メイドという立場があるのに……っ、
こんなに、乱れて……私、私……はああつ、あああつ……！」

「んんうっ……こんなの、初めてですっ……あああつ、
すごいっ……はああ……癖になったら……どう、責任をおっ……！」

「もう、頭が真っ白で……訳、分かんないですっ……っ！
お願い、しますっ……名前を……名前を呼んでください……っ」

(本当は一人称「リア」なのに、普段は隠してたイメージ)
「ご主人様、ご主人様あつ……
リア、おかしくなっていましたあつ……！！」

「だって、こんな気持ち良いことを知ってしまったから、
もう、後戻りなんか、はあああ、あ、ああつ……！」

「ああん、やあつ……あああつ……！
リア……だめ、限界……、あ、あ、あつ……！」

「リア、イカされて、しまいますっ……！！
ご主人様につ、あ、ああつ、んんんっ——」

「ご主人様も、苦しそうっ……
リアと、リアと一緒に、気持ちよくなつてっ……！」

「好きなところに出してくだしてくださいっ……！
いいですよっ……リアの中につ……思う存分注いでくださいっ……！」

「はんっ、あ、あ、あつ……イクっ……イク、イクイクっ……！
ご主人様っ……ご主人様、ご主人さまあつ……！」

「あああああああああああああああつ……！」

「あ……ああ、はうっ……んんっ……ハアあつ……
中で、たくさん、ドクドクしてっ……んんっ……」

「はふっ……ふうー……んっ……
お腹の中、満たされていく……みたいで……はあ……」

(キス)
「んっ……ちゅうっ……ちゅぷっ……ちゅれろっ……んっ……
ちゅぱっ……ちゅっ、ちゅうっ……」

「んむあつ……ふう……ふう……はあ……
まったく……呆れるほど、変態で度し難いですね……」

「あれこれ要求して、無責任に中出した挙句、
したり顔を浮かべるなんて……」

「まあ、もう諦めました。

貴方はそういう人だと思って生きていくしかありませんね」

「……あの、一つだけ約束してください。絶対に私が「リア」と言ったこと、誰にもしゃべらないでください」

「……………守れるなら、また、してあげても構いません」

「別に……私は貴方のことが好きとか、嫌いとか……特にありませんけど」

「ただの業務です……初めから、そう言っているでしょう？」

「……やれやれ。相変わらず愚鈍なお方……」

(愛してます、と告白してるようなイメージです)
「本当、ご主人様は最低ですね、ふふっ」